

第一次大極殿院復原検討会 とその成果

— 第一次大極殿院の復原研究 1 —

はじめに 奈良文化財研究所では、奈良時代前半（『平城報告Ⅺ』のⅠ－2期）の第一次大極殿院の諸建築（南門、東西楼、築地回廊）および内庭部の復原考察をすすめている。そのための復原検討会を2010年7月から翌年3月にかけて、計13回開催した。各検討会の議題と報告者は表6のとおりである。検討項目は、文献資料による分析、検出遺構・出土遺物の再検証、既往復原案の再検証、類例研究、および上部構造復原案の検討等である。検討会では、テーマに沿った発表ののち参加者全員による討論をおこなった。検討会の事務局は、都城発掘調査部遺構研究室が務めており、検討会は2011年度も推進する予定である。

なお、既往の復原案としては、『平城報告Ⅺ』（1982）、『1／100模型案』（1993）、『平成13年度案』、『平成14年度案』の4案があり、それぞれ異なっている。

以下に2010年度の検討成果と今後の課題を述べる。

第一次大極殿院全体 文献資料について、「六国史」にみられる門や楼に関する史料の収集を網羅的におこなった。また、奈良に所在する古代寺院の門や楼について、資財帳を中心とする史料の検討をおこなった。文献で南門や楼といった語は散見するものの、奈良時代前半の大極殿院の諸施設について判明する史料はきわめて限られる（第1回検討会）。諸建築に関わる検討結果は後述する。

中国の第一次大極殿院相当施設については、文献資料にみられる隋代の大興宮・洛陽宮、唐代の太極宮・大明宮・洛陽宮の様相を検討した。その結果、中軸線上に建つ門は重層をとる例が多い、門闕構造がみられる、回廊の東西辺に門が開く、比較的大きな門の両脇に小門が付属する、という傾向があることが判明した。また、隋代洛陽宮内庭部には東西対称位置に井戸があり、第一次大極殿の南東で発見されている井戸の評価についても再考する必要がある（第4回検討会）。

朝鮮半島の第一次大極殿院相当施設については、発掘資料にみられる三国時代から高麗時代における様相が報告された。三国時代、統一新羅時代の宮殿遺構は少ないが、公山城の臨流閣（百濟中期）と考えられる遺構は東西楼復原の一資料となる可能性がある。また、渤海上京龍泉府では矩形都城の遺構が検出されている。上京龍泉

府は、遺構の構成や日本と渤海の関わりから、平城京の影響も受けている可能性が指摘され、第一次大極殿院相当と考えられる遺構については、重要な参考事例となる可能性がある（第5・9回検討会）。

南門 検出されている遺構は、ほぼ基壇および階段の痕跡のみである（第1・11・13回検討会）。既往復原案の再検証等の詳細は別稿にゆずる。

文献資料については、『続日本紀』にみられる「重閣門」「重閣中門」の語は、第一次大極殿院南門を指すと断定できず、直接的に南門の形態を示す史料はないとの結論を得た。また、平城宮跡中央区朝堂院地区で検出された南北掘立柱塼痕跡が騎射の遺構であれば、南門遺構と文献資料を関連づけられる可能性があったが、絵画資料にみえる騎射の観覧方法等の検討から、掘立柱塼痕跡は騎射の遺構ではない可能性が高いとの結論を得た（第2・6・11回検討会）。

その他の上部構造を決める根拠として、平城宮をはじめとする古代宮都および古代寺院の門遺構、および現存する門遺構の資料を対象に事例研究をおこなった。南門の遺構は先述のように基壇と階段の規模しか判明していないため、比較検討できる例が限られるものの、基壇の縦横比、基壇と階段幅の寸法比、想定される組物形式や基壇規模の関係などから、上部構造は桁行5間・梁行2間、重層である可能性が高いことが判明した。今後、重層のうち楼門か二重門に絞り込むこと、および柱間寸法を決めていくことが主な課題である（第13回検討会）。

東西楼 検出遺構は、主に基壇、側柱の掘立柱の抜取穴、内部柱の礎石の根石等である。また柱間寸法は、桁行15.5尺等間、梁行13尺等間と判明している（第1・12回検討会）。

文献資料については、『続日本紀』にみられる「南楼」が第一次大極殿院東西楼の総称である可能性があり、『日本後紀』天長7年8月29日条の、犬が栖鳳楼に登って吠えたという記述から、平安時代の楼には上層に上がるための常設階段があった可能性がある（第6回検討会）。具体的な形状や機能については、さらに諸資料を収集し、検討する必要がある。

上部構造について、抜取穴より径75cmもの側柱の柱根が出土しており、しかも柱抜取穴の深さは2.5～3.0mと深く、長大な柱を用いた可能性が高いことから、通柱を

用いた上部構造と考えられる。礎石上に立つ内部柱の径は不明だが、礎石抜取穴の径が築地回廊と同程度であるため、側柱より細く、通柱ではなく上層の床を支持するための柱であった可能性が高い。また、東楼、西楼とも、東妻の柱穴のうち1つは、抜取穴がなく版築状の地業がみられることから掘立柱ではなかった可能性が高いが、この理由や上部構造とのかかわりについては引き続き検討を進める（第12回検討会）。

築地回廊 検出遺構は、主に南面の基壇外装、礎石、雨落溝の痕跡である。また、Ⅱ期の築地堰板抜取溝と解釈されている遺構を検出しており、築地基底部の幅の根拠となる可能性がある。なお、築地高さの検討には、「延喜式」にみえる築地塀の規模が参考となる（第7回検討会）。

出土遺物に関して、第一次大極殿院地区における鬼瓦の出土位置とその状況が報告された。その結果は、第一次大極殿院の四隅および南門周辺、東西回廊の北および南から1／4程度の位置からの出土が多く、回廊に開く小門の位置に関連している可能性がある。さらに、文献資料にみられる平安時代の大極殿儀などをみると、平安時代の八省院回廊には機能上小門が求められる。どこまで第一次大極殿院に遡及して考えられるかが今後の課題である。その他、「年中行事絵巻」にみられる平安宮の築地回廊の様相は、用途、意匠、儀式時の荘厳などの復原に有効であることが判明した（第3・7回検討会）。

上部構造については、築地を棟下までのばす案や築地上を壁で遮蔽する案などが検討されたが、築地回廊が厳重な遮蔽性能をもち、儀式の場にもふさわしい構造・意匠をもつとすれば、既往の復原案にみられる三棟造案が適当という結論を得た（第7回検討会）。今後、東西面を中心とする築地回廊の柱位置、小門の位置や規模について、Ⅱ期の様相を含め、平城宮をはじめとする発掘遺構や出土遺物からの検討が必要である。

内庭部 検出遺構は、礫敷、磚積壇、溝、暗渠、斜路等である。今後は、主に地形および磚積壇の細部仕様、高欄の有無、内庭部の設えを復原するための検討が必要である。特に内庭部の設えについては、未発掘部の地下探査を視野に入れ、幢竿支柱とみられる遺構の解釈を含めた発掘遺構および文献等の検討が必要である（第1・8回検討会）。

（井上麻香）

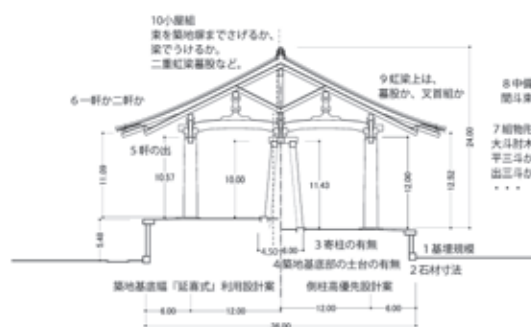


図56 築地回廊梁架標準断面案

表6 2010年度開催 第一次大極殿院復原検討会一覧（敬称略）

回数	開催日	議 題	報告者	所 属
第1回	2010/7/23	全体計画と今後の検討事項	箱崎和久	遺構研究室
		文献史料からみた大極殿院内の諸施設（南門・楼閣）	渡辺晃宏	史料研究室
		検出遺構の確認	大林 潤	遺構研究室
第2回	2010/8/24	重開門をめぐる補考／宮東面門の門号をめぐる／資財帳にみえる奈良時代の寺院の門と楼	渡辺晃宏	史料研究室
第3回	2010/9/10	平安時代の大極殿儀一回廊の機能を中心として	山本 崇	史料研究室
		第一次大極殿院の瓦①	中川あや	考古第3研究室
第4回	2010/10/6	中国における大極殿院相当施設の様相	吉田 敏	山形県立米沢女子短期大学
第5回	2010/10/15	発掘資料に見る大極殿院相当施設と南門・楼・回廊―高句麗・新羅・渤海・高麗―	千田剛道	奈良文研名誉研究員
第6回	2010/10/25	六国史にみえる9世紀以降の平安宮などの楼の史料、大射・騎射の大きな違い	渡辺晃宏	史料研究室
		中央区朝堂院の仮設建物と櫓列―騎射の場	鈴木智大	遺構研究室
第7回	2010/11/5	第一次大極殿院回廊の標準断面	鈴木智大	遺構研究室
第8回	2010/11/25	第一次大極殿東西楼の復原案の推移	海野 聡	遺構研究室
		第一次大極殿院回廊内部・地形復原にかかわる検討課題	大林 潤	遺構研究室
第9回	2010/12/1	渤海 上京龍泉府の宮殿遺構	井上和人	副所長
		大極殿院南門の上部構造検討史と今後の課題	箱崎和久	遺構研究室
第10回	2010/12/22	宮殿遺構の調査報告―第一次大極殿院相当施設の遺構―	北山夏希	遺構研究室
		第一次大極殿院東西楼事例研究の中間報告	井上麻香	遺構研究室
第11回	2011/1/26	「重開門」の解釈について／第一次大極殿院南門遺構の検討	箱崎和久	遺構研究室
第12回	2011/2/10	東西楼の発掘遺構の再検討	海野 聡	遺構研究室
第13回	2011/3/10	第一次大極殿院南門の遺構と類例の検討-1 発掘遺構からわかること	井上麻香	遺構研究室
		第一次大極殿院南門の遺構と類例の検討-2 類例の検討	北山夏希	遺構研究室